

0 はじめに

0.1 弁解

- デカルトは哲学関係本に極めて出現頻度が高い。
- 参考資料がものすごいスピードで集まり、キャパ・オーバーになってしまいました…。

0.2 概要

- 「中世という文脈のなかでデカルトの思想がどんな意味を持ち、その著名な著作の一つ『方法序説』を読解し、「近代哲学の祖」とも呼ばれるデカルトの後世に与えた影響を説明する」という報告担当者の野望は潰える。(準備時間・発表時間・報告担当者の無能のため)
- 一つ一つの内容は簡単になるが、いろいろ紹介して興味をもった人が深めてゆけるきっかけにしたい。
- 1において「デカルトというひと」と題し、デカルトの生きた時代を概説する。その後、デカルトの経歴と『方法序説』がどんな位置づけのテキストであるかを確認する。
- 2においては具体的に『方法序説』の内容をみる。ポイントの紹介が中心だが、重要と思われる部分はゆっくり読んでみる。批判は自力では不能。わからない点を話し合っていくテキストの理解を深めていく形にしたい。
「昨年から久しぶりに演習を持っていて、レヴィナスをテキストにしています。だいたい一回の講義で読めるのはせいぜい五行から 10 行。一語一語、丹念に読んでいきます。」(鷺田清一)
- 3においてはデカルト批判を紹介する。

1 デカルトというひと

- 「DNA」の構図。
- 一生かけて学問の全体が真に確実な知識の体系となることを目指した。

1.1 デカルトの教育的・標準的理解

(別紙コピー参照)

1.2 中世ヨーロッパという状況、デカルトとの対比として

(別紙コピー参照)

1.3 デカルト小伝、方法序説前後

11 歳になったデカルト少年はラ・フレーシュ学院に入学する。教育内容、設備は当時の最先端であった。ここで彼は思う存分「過ぎ去った世紀の一流の人々との対話」に没頭することになる。8 年半の学院生活に別れを告げ、父の希望で法学を学ぶ、一年で優秀な成績で法学士の学位を取得する。しかし、法学関連の仕事につくことはせず、10 年ほど家族のもとにとどまり、当初の希望通り「世界という大きな書物」に学ぶべく、オランダ・ドイツ・イタリア各地を旅行する。

23 歳の冬、「生涯をかけて私の理性を養い、そしてできうる限り真理の認識において前進する」決意をする。ここから思索・自己との対話をかさねた。「他のことは一切取り留せずに」徹底的に集中した時期もあったという。そして、ついに 1637 年『方法序説』出版。1641 年には『省察』、1644 年には彼自身「私の哲学の集大成」と述べる『哲学原理』を刊行する。晩年は『情念論』にいたる。

1.4 デカルトの著作の一つとして『方法序説』の位置づけは？

- デカルト 41 歳のとき、著者名無しで出版された。
- 当時学術書はラテン語で書かれるのが普通だったが、フランス語で書かれる。近代フランス精神のモデルとも言われる。「フランス語で書くのは、生まれつきの理性のみを用いる人々のほうが、昔の書物しか信じない人々よりも、私の意見をいっそう正しく判断してくれるだろうと思うからである。」
- 「世間・世界という書物」に学ぼうとしない者達への批判。
- デカルトがはじめて公刊した著作。
- 『理性を正しく導き、学問において心理を探究するための方法の話[序説]。加えて、その方法の試みである屈折光学、気象学、幾何学』
- 全体で 500 頁以上の大著の最初 78 頁分が『方法序説』。位置づけは序文であるが、その内容は確固たる知の方法論に関する論文といえる。自伝的。
- 分量は 3 つの科学論文の方が多いが、あくまでそれらはデカルトの方法「その試み」となっている。デカルトの思考方法への問題意識の高さ。
- のちに『省察』：形而上学の主著。
- 『哲学原理』：自然学を含めた体系の全容。
- 晩年、『情念論』：心身の結合と道徳。

2 『方法序説』の内容

第一部 学問にかんするさまざまな考察

- デカルトが学校で学んだ人文学やスコラ学などの諸学問を検討する。
- それらは不確実であり、人生に役立つ物ではない。
- 書物の学問を捨て、旅に出る理由。
- 「世間という大きな書物」
- 寺山修司『書を捨てよ、町に出よう』

第二部 デカルトが探求した方法の主要な規則

- 思索によって得た学問あるいは自分の思想を改革するための四つの規則。(名証、分析、総合、枚举)
 - 1、私が明証的に真であると認めたうえでなくては、いかなるものも真として受けいれないこと。
 - 2、私が吟味する問題のおおのを、できるかぎり多くの、しかもその問題を最もよく解くために必要な数だけの、小部分に分かつこと。
 - 3、最も単純で最も認識しやすいものから複雑なものへと順を追って昇ること。
 - 4、何ものも見落とす事がなかったと確信しうるほどに、完全な枚举と全体にわたる通覧をおこなうこと。
- 諸学問の普遍的な方法となりうると期待できる。

第三部 方法からひきだした道德上の規則

- 道德（モラル）について。
- 三つの暫定的な実生活の指針。
 - 1、私の国の法律と習慣とに服従し、幼時から教え込まれた宗教を堅持し、ほかのすべてのことでは、もっとも穏健な意見に従って自分を導くこと。
 - 2、私の行動において、できるかぎりしっかりした、またきっぱりとした態度をとり、いかに疑わしい意見でも、いったんそれをとると決心したらそれにしたがいつづけること。
 - 3、運命に打ち勝つより自分に打ち勝ち、世界の秩序を変えるよりもじぶんの欲望を

変えようとつとめること。

- 暫定的とは断られているが、デカルトは終生これ以上の道徳を見いだしていない。

第四部 神と人間精神の存在証明＝デカルトの形而上学の基礎

- 形而上学：物事の根本原理を探究する学問。物そのものでなく、抽象化したり相対化したりする。
- Metaphysics. 一つ上のレベルから考えてみる。「DNA」の構図。
- 方法的懐疑→「精神としてのわたし」、「神」、「外界の存在」が示されていく。
- 「コギト・エルゴ・スム」「われ思うゆえに我あり」。後の言葉でいうと心身二元論。

第五部 自然学の諸問題

- 刊行されなかった『世界論』の要点が想像上のものとして書かれる。
- 『世界論』とは、デカルトが自然学全体を秩序立てて調べようとした試みのこと。
- 宇宙、自然現象、機械的な人体論、心臓、血液循環、人間と動物の区別など。
- 当時、新しい科学や哲学は旧来の学問や宗教の陰しい相克のなかにあり、弾圧されることもしばしば。この危険を回避するために『世界論』は刊行中止に。

第六部 自然の探求のために必要なこと、本書執筆の理由

- デカルトはガリレイ事件に衝撃をうける。
- 学問の展望。人間を自然の支配者とする哲学。
- 自然の研究。それはどのような意味を持つか。
- 『世界論』刊行中止のいきさつと、テキストを後世に残す理由。

3 デカルト、近代思想への批判

3.1 いろいろなデカルト批判

- デカルト的思想を基礎・出発点とする近代思想全般に対し、見直しと批判の機運が上昇している。
- キーワードでいうと「脱構築」（ジャック・デリダ）、「アフォーダンス」（J・ギブソン）などの立場が、デカルト的考えのアンチテーゼとなり止揚を試みている。
- 心身二元論。心身問題。キリスト教の、身体が減びても魂は不滅だとする「霊肉二元論」に深く影響されている。

3.2 心身二元論を乗り越えようとする試み

- モーリス・メルロ＝ポンティ（別紙コピー参照）。
- 「いま/ここ」という現実世界への身体による繫留（P・ヴィヴィリオ）。デカルトは「消化腺」というかなり怪しい（個人的感想）概念により説明するが…。

松王政浩「バーチャルリアリティと身体——情報倫理的アプローチ」……ポール・ヴィヴィリオ（都市、建築という視点から文明批評を行っているフランスの都市計画研究家、思想家）は、テレビやインターネットによる通信などのいわゆる「テレプレゼンス(tele-presence, 電子的媒体により遠隔地にあたかも自分が実在するかのような効果)」を評して次のように述べる。我々は、惑星とエコロジーの身体、社会的身体、生物的身体 という3つのレベルの身体をもち、そこから身体に関して自らを再構成する、すなわちまず「他者」に関して、そして「大地」あるいは「固有の世界」に関して 自らを再構成する。固有の世界の中に位置づけられることがなければ、固有の身体はない。その位置づけは、「ここに、今いる」という形でなされる。ところが、テレプレゼンスにおいては、「ここで、今」というのが否定されるので（「ここ」あるいは「今」のいずれかが否定される）、テレプレゼンスが何らかの固有な世界の中に位置づけられることはなく、したがって固有の身体をもたない。バーチャルリアリティの本質的な特徴は、この固有の身体の喪失にある。（ヴィヴィリオは、こうした身体喪失がたとえば「他者」の喪失につながり、ある種の文明的危機を孕むことをこれに続けて述べている。）……

(<http://www.fine.bun.kyoto-u.ac.jp/tr2/matsuou.html>)

- 社会学者・元京都大学総合人間学部教授である大澤真幸は、身体にかなり確固たる地位を与え引き合いに出すことが多い。例えば『身体の比較社会学Ⅰ』『同・Ⅱ』とか。

参考文献（順不同、今回の報告準備のために少しでも目を通したもの）

- デカルト『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫、1953 年
- 野田又夫『デカルト』岩波新書、1966 年
- 斎藤慶典『シリーズ・哲学のエッセンス デカルト 「われ思う」のは誰か』NHK 出版、2003 年
- 鷲田清一・永江朗『哲学個人授業』バジリコ株式会社、2008 年
- 長谷川宏『いまこそ読みたい哲学の名著』光文社、2007 年
- 貫成人『哲学マップ』ちくま新書、2004 年
- 貫成人『図説・標準 哲学史』新書館、2008 年
- 岩田靖夫『ヨーロッパ思想入門』岩波ジュニア新書、2003 年
- 岩田靖夫『いま哲学とはなにか』岩波新書、2008 年
- 竹田青嗣・西研『はじめての哲学史』有斐閣アルマ、1998 年